

〔茶之湯六宗匠傳記^五〕小堀遠江守政一公之像

一御先祖は織田常眞に仕へ、小堀彌介と云し人の末裔也、御當家被召出大名と御成被成し、彌介殿之知行、今に泉州和州に有、御居住近江の小室也、御子孫代々此所に居住也、遠州は織部の秘藏門弟にて、分^テ器用御目利隨一、世に名高く、御一代に名物之茶又多く御取出し名を付、今の世まで世の重寶となるのみか、末代の鏡也、其外器物多く物數寄をま^とふ、其功如神、宗甫公^一○政の後、に茶之湯の宗匠絶終^ス、是と云も遠州公ほどの人なき故ならん、正保四年二月六日、行年六十九歳にて卒去ま^たまふ、此年元祿九年二月六日、五十年回忌に相當る、則孤蓬庵に御墓所有、

〔藩翰譜^六小堀〕

遠江守藤原政一は、

初名は新助、其號は宗甫

近江國住人小堀勘解由左衛門某孫新助某が子なり、

略

○中政一初め豊臣家に仕へて、其後徳川殿に召仕はれ、

近江國にて一万二千石

元和九年、伏見奉行職に補せられ、職にある事二十餘年、正保四年二月六日、六十九歳にて卒しぬ、

略

○中古田織部正重能、利休上足の弟子にして、政一又古田が第一の門人なり、其道の事は云ふに及ばず、手能く書き、歌よみ、眼

略

高く、書畫萬の器珍、悉く其鑒定を待て、世の價を高下す、されば水より出し、氷藍より出る青色、世

世の先達を超過して、上中下のもてなし、譬を取るに言葉なし、其子備中守政之、父が家を繼ぎ、父が風を殘せり、

〔嚴有院殿御實紀附録^下〕

茶技は室町家中葉よりはじまり、豊臣殿下の頃となりては、いとさかんになりもてゆき、軍陣騷擾の間にも、これをもて風流の雅戲とし、はては互に門戸をたて、流派を

きそふに至り、茶博の徒はいふもさらなり、大名にも古田織部正重勝、小堀遠江守政一、片桐石見

守貞昌など、名あるものども出來たり、大猷院殿^{○徳川家光}にも常にこの御好おはしましければ、當

代^{○徳川家綱}もおなじくすかせ玉ひ、燕間の折からは一爐の松風に御心をすましめ、三椀の雲腴に

世塵を洗はしめ玉ひき、其外三家の就封、京坂兩職を餞せらるゝにも、老臣の燕見にも、これもて